

問題 1

1. 真偽表を使って、 $(p \wedge \neg q) \vee (\neg p \wedge q) \equiv (p \vee q) \wedge \neg(p \wedge q)$  となることを示せ。
2. 前提  $\neg R$ ,  $\neg Q \vee R$ ,  $\neg P \vee Q$  が与えられたとき、結論として正しいものはどれか？

- A)  $Q$       B)  $\neg P$       C)  $P \vee Q$       D)  $\neg P \rightarrow R$

1. 以下の真偽表から、 $(p \wedge \neg q) \vee (\neg p \wedge q) \equiv (p \vee q) \wedge \neg(p \wedge q)$  が成立することが分かる。

$p$	$q$	$\neg p$	$\neg q$	$p \wedge \neg q$	$\neg p \wedge q$	$(p \wedge \neg q) \vee (\neg p \wedge q)$	$p \vee q$	$\neg(p \wedge q)$	$(p \vee q) \wedge \neg(p \wedge q)$
T	T	F	F	F	F	F	T	F	F
T	F	F	T	T	F	T	T	T	T
F	T	T	F	F	T	T	T	T	T
F	F	T	T	F	F	F	F	T	F

2. 正解は B)  $\neg P$

【解説】

以下の真偽表から、 $\neg Q \vee R$  と  $\neg R \rightarrow \neg Q$  が同値、 $\neg P \vee Q$  と  $\neg Q \rightarrow \neg P$  が同値であることが分かるので、与えられた前提を  $\neg R$ ,  $\neg R \rightarrow \neg Q$ ,  $\neg Q \rightarrow \neg P$  と書き換えることができる。

$\neg R \rightarrow \neg Q$  と  $\neg Q \rightarrow \neg P$  が真であるとき、 $\neg R \rightarrow \neg P$  が真である（三段論法）。

よって、前提  $\neg R$ ,  $\neg Q \vee R$ ,  $\neg P \vee Q$  から  $\neg P$  が導かれる。

$Q$	$R$	$\neg Q$	$\neg R$	$\neg R \rightarrow \neg Q$	$\neg Q \vee R$
T	T	F	F	T	T
T	F	F	T	F	F
F	T	T	F	T	T
F	F	T	T	T	T

## 問題 2

1.  $(A_\lambda)_{\lambda \in \Lambda}, (B_\sigma)_{\sigma \in \Sigma}$  は集合族である、 $(A_\lambda)_{\lambda \in \Lambda} \subseteq (B_\sigma)_{\sigma \in \Sigma}$  とする。このとき、 $\cap(B_\sigma)_{\sigma \in \Sigma} \subseteq \cap(A_\lambda)_{\lambda \in \Lambda}$  となることを示せ。
2.  $f: A \rightarrow B$  を写像とする。  $P, Q$  は  $A$  の部分集合。このとき、以下の関係式を証明せよ。

$$P \cap Q \subset f^{-1}(f(P) \cap f(Q))$$

3. 任意の  $x, y \in \mathbb{R}$  に対し、

$$x * y > 0 \text{ であるとき } xTy$$

として  $\mathbb{R}$  上の 2 項関係  $T$  を定義する。 (\* は通常の乗算)

このとき、2 項関係  $T$  が反射律、対称律、推移律をみたすかどうかを判断し、その理由を簡単に説明せよ。

1.  $x$  を  $\cap(B_\sigma)_{\sigma \in \Sigma}$  の任意元とすると、 $\cap$  の定義により、 $\forall \sigma \in \Sigma, x \in B_\sigma$   
また、 $(A_\lambda)_{\lambda \in \Lambda} \subseteq (B_\sigma)_{\sigma \in \Sigma}$  より、 $\forall \lambda \in \Lambda, \exists \sigma \in \Sigma, A_\lambda = B_\sigma$   
よって、 $\forall \lambda \in \Lambda, \exists \sigma \in \Sigma, B_\sigma = A_\lambda \wedge x \in B_\sigma$  が成立し、  
 $\forall \lambda \in \Lambda, x \in A_\lambda$  が成立する。  
よって、 $x \in \cap(A_\lambda)_{\lambda \in \Lambda}$  となる。  
 $x \in \cap(B_\sigma)_{\sigma \in \Sigma} \implies x \in \cap(A_\lambda)_{\lambda \in \Lambda}$  となるので、  
 $\cap(B_\sigma)_{\sigma \in \Sigma} \subseteq \cap(A_\lambda)_{\lambda \in \Lambda}$  が示された。

2.

$$\begin{aligned} x \in P \cap Q &\implies x \in P \wedge x \in Q \\ &\implies f(x) \in f(P) \wedge f(x) \in f(Q) \\ &\implies f(x) \in f(P) \cap f(Q) \\ &\implies x \in f^{-1}(f(P) \cap f(Q)) \end{aligned}$$

よって、 $P \cap Q \subset f^{-1}(f(P) \cap f(Q))$  が示された。

3.  $T$  は対称律と推移律をみたすが、反射律をみたさない。  
 $0 * 0 = 0$  なので  $x = 0$  のとき、 $xTx$  は成立しない。よって、 $T$  は反射律をみたさない。  
 $x, y, z$  を任意実数とする。  
 $x * y > 0$  ならば  $y * x = x * y > 0$  なので、 $T$  は対称律をみたす。  
 $x * y > 0$  ならば  $x, y$  がともに正の実数または  $x, y$  がともに負の実数である。よって、 $xTy \wedge yTz$   
ならば  $x, y, z$  がすべて正の実数または  $x, y, z$  がすべて負の実数で、 $xTz$  となる。よって、 $T$  は対称律をみたす。

### 問題 3

実数から実数への写像全体の集合を  $\mathcal{F}$  とする。 $\mathcal{F}$  の任意の 2 つの元  $f_1$  と  $f_2$  に対し、

$$\forall x \in \mathbb{R}, f_1(x) \leq f_2(x) \text{ のとき } f_1 \preceq f_2$$

として順序関係  $\preceq$  を定義する。

$f_1, f_2, f_3 \in \mathcal{F}$ ,  $f_1(x) = x + 1$ ,  $f_2(x) = 2x$ ,  $f_3(x) = x^2$  のとき、 $(\mathcal{F}, \preceq)$  において、集合  $\{f_3, f_1 \circ f_3, f_3 \circ f_2, f_1 \circ f_2 \circ f_3\}$  の極小元・極大元・最小元・最大元が存在するかどうかを述べ、存在するならばそれを求めよ。

すべての  $x \in \mathbb{R}$  に対し、

$$f_3(x) = x^2$$

$$f_1 \circ f_3(x) = x^2 + 1$$

$$f_3 \circ f_2(x) = (2x)^2 = 4x^2$$

$$f_1 \circ f_2 \circ f_3(x) = 2x^2 + 1$$

$$f_3 \preceq f_1 \circ f_3 \preceq f_1 \circ f_2 \circ f_3, \quad f_3 \preceq f_3 \circ f_2 \quad \text{である。}$$

よって、集合  $\{f_3, f_1 \circ f_3, f_3 \circ f_2, f_1 \circ f_2 \circ f_3\}$  の

極小元は  $f_3$

極大元は  $f_1 \circ f_2 \circ f_3$  と  $f_3 \circ f_2$

最小元は  $f_3$

最大元は存在しない。

#### 問題 4

$\mathbb{R}$  から  $\mathbb{R}$  への写像  $f$  を  $f(x) = |1 - x| - 1$  として定める。 $\mathbb{R}$  の任意の元  $x$  と  $y$  に対し、 $f \circ f(x) - f \circ f(y) = 0$  が成り立つとき  $xTy$  として 2 項関係  $T$  を定義する。このとき次の問いに答えよ。

1. 合成写像  $f \circ f$  が単射であるかどうか、ならびに全射であるかどうかを理由を付けて答えよ。
2. 2 項関係  $T$  が  $\mathbb{R}$  における同値関係となることを示せ。
3. 元 1 の同値類を求めよ。

1.  $f \circ f(0) = f \circ f(2) = 0$  より  $f \circ f$  は単射ではない。  
 $f \circ f(\mathbb{R}) = \{x \in \mathbb{R} \mid x \geq -1\}$  より、 $f \circ f(x) = -2$  を満たす  $x$  は存在せず、よって  $f \circ f$  は全射ではない。
2. 反射律： 任意の  $x \in \mathbb{R}$  に対し、 $f \circ f(x) - f \circ f(x) = 0$  が成り立つので、 $xTx$  である。  
対称律：  $xTy$  とすると、 $T$  の定義より  $f \circ f(x) - f \circ f(y) = 0$  という関係が成り立つ。すると、 $f \circ f(y) - f \circ f(x) = 0$  となるので、 $yTx$  をみたす。  
推移律：  $xTy$  と  $yTz$  とすると、 $T$  の定義より  $f \circ f(x) - f \circ f(y) = 0$ 、 $f \circ f(y) - f \circ f(z) = 0$  という関係が成り立つ。すると、 $0 = (f \circ f(x) - f \circ f(y)) + (f \circ f(y) - f \circ f(z)) = f \circ f(x) - f \circ f(z)$  となるので、 $xTz$  をみたす。  
反射律、対称律、推移律が成り立つので、 $T$  は同値関係である。
3.  $f \circ f(1) - f \circ f(x) = 0$  をみたす  $x$  が同値類である。つまり、方程式  $f \circ f(x) = 1$  の解を求めれば良い。よって、元 1 の同値類  $C(1)$  は  $C(1) = \{-3, 1, 5\}$  である。